

支部の発展と印刷業界の未来について、熱〜く話し合いました！



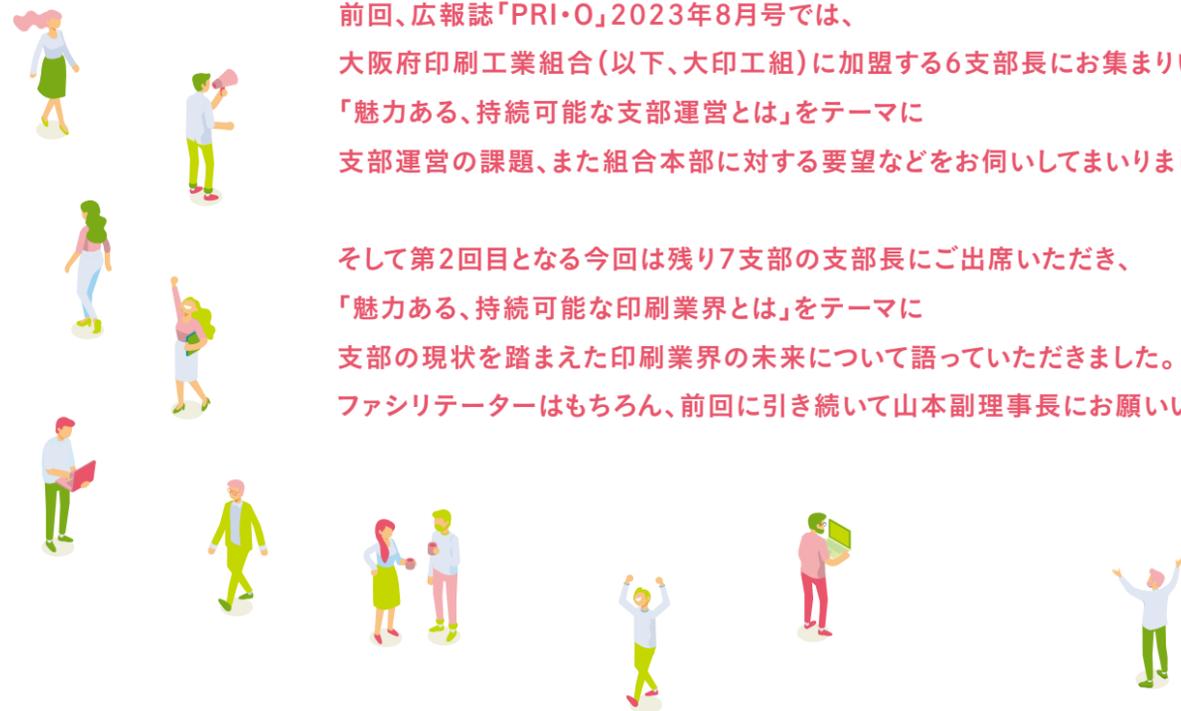
支部長
座談会

Part 2

魅力ある、持続可能な印刷業界とは

前回、広報誌「PRI・O」2023年8月号では、大阪府印刷工業組合（以下、大印工組）に加盟する6支部長にお集まりいただき、「魅力ある、持続可能な支部運営とは」をテーマに支部運営の課題、また組合本部に対する要望などをお伺いしてまいりました。

そして第2回目となる今回は残り7支部の支部長にご出席いただき、「魅力ある、持続可能な印刷業界とは」をテーマに支部の現状を踏まえた印刷業界の未来について語っていただきました。ファシリテーターはもちろん、前回に引き続いて山本副理事長をお願いいたしました。



組合は負担なのか 自己成長を促す学びの場なのか？

山本(素)： 本日はご多忙のなかで参集いただき感謝申し上げます。では前回に続いて各支部のご紹介から特徴、課題などお話しただきたいと思っております。トップバッターは生栄支部、松原支部長からお願いいたします。

松原： 生栄支部は13社と他支部と比較して小規模ながら、今年度より大印工組へ2名の常務理事を輩出しています。支部内では「支部を代表して本部で頑張ってくれている。少しでもバックアップしよう」という雰囲気があり、それが支部活性化の後押しにもなっているように感じます。一方で誰かがどこかの委員会に属しているような状態なので、一人ひとりの負担が重くなっているのも事実です。支部長はじめ支部組合員の負担軽減がひとつの課題です。

生栄支部の役員は8名いますが、本当に仲がいいんです。その反面、「この中に入ると何かやらされる」という空気感というか壁のようなものを僕たちが作ってしまっているような気がしています。生栄支部も零細企業が多くを占めています。経営者自ら営業、現場、納品、集金まで行うことも多く、そこに「支部」という負担が増えるのは堪忍して、みたいな空気を感じることがあります。

そんな空気感を払拭したい。私は平日頃から、組合の事業に一步踏み込んで来てほしいと思っています。それが負担になるのか、はたまた自己成長を促す場になるのか、まずは一步踏み込んでみて判断していただければと思っています。



生栄支部長
松原利行



山本(素)： 私也大印工組の委員会に入った当時は、「こんな実利にならない会に時間を費やすのがもったいない」と若気の至りで、ほとんど欠席していた時期がありました。

組合事業が負担になるのか自己成長に繋がるのか、最終的にはご自身の気付きだと思うんです。私たちは今後の印刷業界を考えると、この気付きを与えていけるような組織運営を心がけていかなければと思えました。では再来年の2025年に支部設立100周年を迎えられる、北親支部の山本支部長をお願いいたします。

北親支部長
山本隆之



山本(隆)： 私は北親支部の支部長を拝命して2年目になります。いまの課題としましては、支部組合員数の減少に歯止めがきかないことです。先日退会企業が出まして37社となってしまいました。当支部の特徴として、支部に入る前から得意先として繋がりのある企業が多いように感じています。いわゆる元請けと下請けのような関係で「あの人に言われたから支部に加入する」といった関係が多く見受けられます。そうすると「仕事の関係がなくなる＝退会」という構図が出来上がってしまうのも事実。共済事業やAdobeのライセンスサービスなど、組合加入のメリットはあるものの、退会を食い止めるまでの効力ではないというのが現状です。

2025年に北親支部は設立100周年を迎えます。長い歴史を築いてこられた先人に感謝しながら、薄れつつある支部への帰属意識を高め、若手の次世代経営者が加入したくなるような支部になれるよう、支部長として努力していきたいと思っています。2025年は大阪・関西万博が開催される年なので、そこを絡めながら盛大なイベントを企画していきますので、楽しみにしておいてください。

山本(素)： 組合・支部とは何か？という思いや、また加入しているメリットが薄れることが帰属意識を低下させる理由のひとつに挙げ



QRコードから各支部ページへアクセスしてみてください！

副理事長
山本素之

られるのだと思います。本部も協力しますので100周年を機にといわず、明日からでも支部の活性化にご尽力ください。では次、摂陽支部の米花支部長をお願いいたします。

米花： 私が支部長に就任してから早6年目を迎えました。当支部は15社の企業で構成されており、支部内交流は活発ですが、本部事業については動きが鈍いように感じています。委員会を含めた本部事業に参加すると、どうしても「何かやらされる（負担が増える）」という意見が多いのが現状です。委員の交流を通じて「将来、必ず自己成長に繋がるから」と今期は5つの委員会すべてに摂陽支部から出席させようと促しましたが「それやったら支部を退会する」と非常に本部事業についてネガティブなところが課題です。

確かに社長が朝から晩まで仕事に追われるなか、夕方から委員会事業に参加というと、さすがにハードルは高いのは理解できます。大印工組の本部事業に参加することが自社の成長に繋がることを言い続けながら、若手の育成も含めて支部活性化に力を注いでいきたいと考えています。



摂陽支部長
米花正晃



山本(素)： 本部事業を通じて、今後の印刷業は社会から何を求められているのか、それを持ち帰っていただき、今後の事業変革に役立てていただきたいと思っています。また本部事業は人的交流も含めてモチベーションアップに最適だと思います。既存事業と新規事業を考えていくうえで社会のニーズを捉えることは必須です。ここをしっかりと学んでいただけるような本部活動を心がけていきたいと思っています。次は、今期から「活潑潑地（かつぱつぱち）」を基本方針に掲げられた東和支部の平石支部長、お願いします。



平石: コロナ禍も落ち着きつつあるので、東和支部の基本方針として「活潑潑地」を掲げました。変化の激しいこの時代を乗り切っていくため、活きた情報と元気を持ち帰っていただける素敵な集団を目指すという決意を表しています。当支部では数年前から「東和塾」を定期開催しています。この塾は基本座学以外のことを学んでいて、例えば自社のプレゼンテーションを参加者の前で行うなど、経営者としての資質を磨く場を提供してい

ます。コロナ禍も明けましたので「いい仲間と、よく遊びよく学ぶ」。その先に印刷業界の明るい未来があると信じて活動しています。

支部組合員数は44社と比較的大所帯です。2代前の支部長の頃に支部内に委員会を立ち上げ、組織的な支部運営ができるようになってきました。そこから支部長の負担はかなり軽減できたのではないかと考えています。支部の特徴としては、私の父親に近い年代の大先輩や支部長経験者が支部運営を



東和支部長
平石 哲生



バックアップしてくれていることが挙げられます。息子さんも一緒に参加いただいていたので、支部への想いが強い方が多くありがたいです。この「東和支部愛」を後世の人たちにいかに私がどう伝承していけるのか、支部長として残された時間をここに注力していきたいと思っています。

継続した支部運営には 支部組合員数の増強が必須



山本(素): 私も数年前は全国青年部の副議長を拝命していて、同世代の仲間と深夜まで杯をよく交わしました。そのなかで理由は知りませんが、父親が支部長を終えると急に支部活動に消極的になったり、はたまた自身の後継者に「お前は組合なんか行かんてい」と言い切る方がいらっしやると聞いたことがあります。東和支部にはひとこと言い表せない「愛」がある。これは先人たちが作ってくれた遺伝子のようなもの、このDNAを後世にどう繋いでいくのか、支部長は大変だと痛感いたしました。では天親支部の福山支部長、続いてなにわ支部の満谷支部長、八尾南支部の石川支部長お願いいたします。

組合員60社を目指して頑張りたいと思っています。支部組合員が減少すると事業予算もおのずと縮小してしまい、これまで実施してきた事業ができなくなる。伝統ある天親支部を引き継いだからには、そうならないためにも支部組合員数の増強を推し進めていきます。

あと支部内でのビジネスマッチングを活性化するため、情報共有の仕組みを作りたいと思っています。「この会社はどんな仕事得意なのか?」知っているようで知らないことってたくさんあります。時代の変化も速いので、10年前と同じ事業領域かどうか分からない会社もたくさんあります。金額だけでなく、天親支部の信頼できる仲間だから仕事ををお願いする。そんな存在感のある支部にしていきたいと思っています。

満谷: なにわ支部も7年前に南睦支部と西和支部が合併してできた支部です。合併するとうとう退会しやすい環境を作ってしまうのかなと思います。その時で15社程度は退会してしまい、またコロナ禍の影響もあって支部組合員数の減少に歯止めがつかず、現在35社となっています。

私が支部長に推薦されたのは、合併した両支部のことをよく知っていたことが挙げられます。青年部の時代から、両支部合同の事業を行っていた私は両支部の調和を保ちやすい存在として、私に白羽の矢が立ったのだ

なにわ支部長
満谷 健一郎



と思っています。支部の年間事業として、会社見学会、ゴルフ、ビアパーティー、ファミリーハイキングを行っていましたが、コロナ禍の3年間は中止の連続でした。今年からまた再開して懇親の場の提供を図っています。

石川: 八尾南支部は大阪府八尾市にある印刷工業団地に入所している企業を主としていて、現在は10社となっています。昨年からは支部長を拝命したので2年目になりますが、時代の変化にマッチした支部運営を行ってきたいという思いがあります。温故知新をモットーに良いものは残しながら少しずつ時代の変化に対応していきたいと思えます。支部組合員数が少ないのでできることも限定されてしまいますが、コロナ禍も明けたことですので魅力ある支部として若手社長との交流など、コミュニケーションが活発に行えるよう取り組んでいきます。



八尾南支部長
石川 泰雄



印刷業界は社会のニーズを捉え、製造業の一步先へ

山本(素): 3支部長、ありがとうございました。では次は今回のテーマ「魅力ある、持続可能な印刷業界とは」について議論を深めたいと思います。大印工組では2022年に初めて「ペーパーサミット」を開催し、来年で3回目を迎えます。第3回からはクリエイティブネットワークセンター大阪MEBICとの共催となり、世間の注目を集めています。2022年のペーパーサミットから連続で出展されている山本支部長。2022年の初出展に際して、初めて自社商品を開発・販売されたそうですが、どのような感想をお持ちでしょうか。

山本(隆): ペーパーサミットはご存じのとおり、MEBICさんに所属するクリエイターさんと我々印刷業界がコラボして市場にない新たな商品を生むという、今までなかったイベントなので出展に手をあげました。これまでクライアントの要望に応える仕事を中心に、価

格の決定権を持てるような仕事がしたいと思っていたことも参加の一因になりました。

社長を中心として社内のデザイナー、外部クリエイターとが一緒になって、結構な時間を割いてミーティングを重ねて「本を贈る紙袋」が完成しました。まだまだ実利に結びついてはいませんが、弊社のデザイナーも「紙好き」な人たちが多くて楽しみながら企画していけたように思います。今では社会のニーズを踏まえてマーケティングを行うなど、一歩ずつ前進していています。

山本(素): 紙袋を分解するとブックカバーと栞になる「本を贈る紙袋」は正直、「やられたっ」と思いました。今までにない商品を開発することは、魅力ある印刷業界に精通するものがあると思います。アイディア次第で無限大の可能性のあることを学ばせていただきました。

正しい知識武装で表面的情報に流されない

福山: 私たち印刷業界はもっと用紙のことを知る必要があると思います。FSCやライメックスなど表面的な情報だけに踊らされてはいけない。何が本当に環境に優しいのか、また紙である意味がどこにあるのかをクライアントにしっかり話せるよう、知識武装をしなければならないと思います。MUDもそうで、私たちの得意な分野を軸にして誰もが生きやすい社会に何が必要なのかを学び、実践していくことがSDGsや魅力ある印刷業界に繋がるのではと思うんです。

山本(素): このたびは2回に分けて大印工組の13支部長に集まっていただき、本音トークを伺うことができました。また持続可能な印刷業界について、深く考えるよい機会となりました。本部に持ち帰り、今後の事業を改めて考えていきたいと思っています。

今回の座談会では支部長の共通課題として、支部組合員数の減少と若手の育成という声が多く聞かれました。若手の育成に関しては、「大阪青年印刷人協議会」に参加すれば若手の交流を主とした青年部活動が、「印刷経営革新塾」に参加すると次世代経営者のための勉強ができます。また、「ペーパーサミット」に参加すれば、請負から脱却するヒントを得ることができますので、大印工組が提供するこれらのサービスを積極的に使っていただきたい。

環境への取り組みについては、山本北親支部長や石川八尾南支部長がおっしゃるように、「印刷産業環境優良工場」を取得もしくは「グリーンプリンティング」などの認証制度を活用いただきたい。FSCやライメックスなどの環境配慮型用紙に関しては、ハードルが高く、次年度になるかもしれませんが、福山天親支部長がおっしゃるように表面的な情報

初めて自社商品を販売するにあたりマーケティングを行っているとお聞かせください。

山本(隆): ここ数年、社会からの要請のなかで環境というキーワードは外せなくなっているような気がしています。FSC認証用紙や石灰石から作られたライメックスなど、環境配慮型の用紙が需要を伸ばしていますが、大印工組でそのような環境配慮型用紙を開発・販売することはできないのでしょうか。

環境配慮型用紙として「大印工組用紙」を開発してカーボンニュートラルを実現することができれば、組合の存在意義と我々業界の未来に非常にマッチすると思いますので、組合本部で検討してみたいかと思っています。



だけに踊らされないように分析して進めてまいります。

会社の健康診断としてCSR認証へのチャレンジもやってみてわかることがたくさんあります。そういうしつらえを行うためには皆さんのお手伝いが必要です。確かに、本部の委員会に入ると負担になると言われると辛いところもありますが、その委員会に入ることによって新しい気付きが必ずあります。私は新たな自己啓発の場として、本部委員会への参加を推奨します。

全印工連では、DX推進事業のDX-PLAT、経営情報システムMIS事業も着実に進んでいます。持続可能な印刷業界になるためには、満谷なにわ支部長は、群れる目的の再認識が必要とおっしゃっていました。これが今後の印刷業界についての答えなのかと思います。

今後とも業界全体の改善発達を図るために皆様ご協力をよろしくお願いたします。